

事業名称	ニューノーマル時代にアートで人をむすぶプロジェクト		
実行委員会	アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会		
中核館	ボーダレス・アートミュージアムNO-MA		
	住所	〒523-0849 滋賀県近江八幡市永原町上 16	
	TEL	0748-36-5018	FAX
	ホームページ	https://www.no-ma.jp/	
構成団体	NPO 法人はれたりくもったり、滋賀県文化スポーツ部文化芸術振興課、滋賀県健康医療福祉部障害福祉課、滋賀県立美術館、近江八幡市総合政策部文化観光課、一般社団法人近江八幡観光物産協会、滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会、国立大学法人滋賀大学		
事業開始時点の課題分析	<p>本事業の中核館であるボーダレス・アートミュージアムNO-MA（以下、NO-MA）は、障害の有無、プロとアマ等のボーダーを超えた表現の根源的な魅力の発信を志向し、ボーダレス・アートにそのコンセプトを象徴させて活動してきた。特に、芸術文化の受け手として捉えられていた障害者の作品を積極的に紹介し、作り手としての認識を広めるとともに、彼らの作品を擁護的に見るのではなく一つのアート作品として見ることを提示してきた。このことは、間接的に障害理解の促進にも繋がっており、多様な在り方を包含し、人の繋がりをもたらす、芸術文化の持つ力が生かされた取り組みともいえる。</p> <p>当実行委員会では、障害者の芸術文化に関するNO-MAの専門的機能を基に、様々な人が芸術文化を通して繋がる取り組みを行ってきた。具体的には、NO-MAがある滋賀県近江八幡市において、地域店舗との連携や空き町屋を活用した企画展の開催等である。開催にあたっては、近江八幡市を中心とした地域住民の参画を得られるよう、展覧会場で来場者対応や作品説明を行ったり、展覧会や町の魅力を記事にして発信する等のサポーター活動を取り入れた。高齢者のほか、ひきこもり状態にある人や発達障害の人等、誰でも参加できるよう活動内容をわかりやすくする等の工夫をし、多様な人がサポーターとして活動してきた。加えて、芸術文化の受け手としての障害者への対応が、従来は入場料の減免や施設内のバリアフリー化がその中心であったため、鑑賞そのものに着眼し、盲ろう、高次脳機能障害、発達障害等それぞれの障害特性に応じたアートの楽しみ方を探り、障害当事者のモニタリングを受けながら実践を重ねてきた。取り組みを通じて、そこで活動した人同士、活動した人と作者、障害のある作者とプロの作者等様々な繋がりも生まれた。</p> <p>これら芸術文化を通じて様々な人が繋がる取り組みは、国際目標であるSDGsの基本理念「誰一人取り残さない」にも合致しており、NO-MAが所在する滋賀県及び近江八幡市の基本構想（総合計画）もSDGsを根底に置いているため、地域課題にも合っているといえる。</p> <p>このような中、2019年末に出現した新型コロナウイルス感染症の拡大は、全世界に大きな影響を与え、私たちの生活にも大きな転換をもたらした。その出現から1年が経過し、その予防対策としてのマスクの着用、ソーシャルディスタンスの確保、行動の分散、対面の代替及び移動抑制のためのインターネットツールの活用等が新たな生活様式や働き方が常態となった、ニューノーマルの時代を迎えている。芸術文化の取り組みに</p>		

	<p>においても、従来の手法のままではその進展を図ることができない状態となっているが、NO-MAが中心に据えてきた障害者や、サポーター活動に多く参加している高齢者は、介助による接触が避けられなかったり、対面でないと情報が得にくかったり、インターネット環境や活用に関するスキルが十分ではない人が多いという実情がある。また、近江八幡市社会福祉協議会のアンケート（2020年6月実施）によれば、外出機会の減少や、情報取得の難しさなどから、孤立感を感じる高齢者が増えているというデータが挙げられている。このことは、実際にNO-MA近隣の高齢者らの活動が停滞していることを示している。</p> <p>これらのことから、先述のSDGsが掲げる「誰一人取り残さない」という理念をこの時代においても推進されるよう、同目標の5つの主要原則のうち特に「包摂性」と「参画型」を強みとして持つNO-MAがその専門性を発揮し、ニューノーマル時代に合った、かつ誰一人取り残さない芸術文化を通した取り組みが求められている。</p>
<p>事業目的</p>	<p>NO-MAの専門性を生かしながら、ニューノーマル時代において、アートで人をむすび、「誰一人取り残さない」共生的な芸術文化のあり方を、モデル的に示すことを目指す。</p>
<p>事業概要</p>	<p>本事業は、盲ろう者、知的障害者、高齢者を多く含む地域住民を対象とするものである。こうした対象者が、ニューノーマルの時代においても、アートを楽しんだり、アートの発信者となったり、アートをきっかけに交流したりできる機会を創出するための取り組みを行う。（1、2）。</p> <p>また、本事業を、ニューノーマルの時代における共生的な文化芸術のモデル的な取り組みを効果的に共有していくため、特設ウェブサイトを立てる他、動画配信やニューズレターで、内容の記録と継続的な情報発信を行う（3）。</p> <p>1. 障害のある人とアートのニューノーマル</p> <p>——盲ろう者と知的障害者が自ら楽しめる鑑賞方法を創出</p> <p>コミュニケーションに触手話や指点字を用いるため、人との接触が必須である盲ろう者や、情報の受発信に難しさを覚える知的障害者が、ニューノーマル時代に即しつつ、かつ自らに合ったアートの鑑賞方法を主体的に考えるプログラムを実施する。</p> <p>この取り組みを通し、盲ろう者や知的障害者がアートに出会う機会を作ることに加え、ニューノーマル時代における美術鑑賞の方法を、障害当事者が提案することを狙いとする。なお、プログラムを通じてできた鑑賞方法は、NO-MAが主催する展覧会で実践する。</p> <p>2. 地域とアートのニューノーマル</p> <p>——芸術文化の楽しみを地域の人々とシェアし、つながりを守る</p> <p>ニューノーマル時代において、地域をつながりを守ることを目的に、NO-MAがある近江八幡市に根差した高齢者が中心となって活躍する場を創出する。</p> <p>町の歴史についての豊富な知識を活かし、NO-MA主催の展覧会と町歩きガイドを担っていただくほか、地域とアートに関するトーク企画を実施するなど、アートへの主体的な参画を促すプログラムを実施する。このことに加え、美術等に関係する有識者を招き、学びの機会を設ける。</p>

	<p>3. 障害・地域とアートのニューノーマルを伝える</p> <p>——誰一人取り残さない芸術文化のあり方を記録し、生の声を伝える</p> <p>1の取り組みにおいては、障害当事者が鑑賞の方法を考えるという事業の性格から、プロセスを適切に記録する。また、2の取り組みにおいては、地域住民が本事業に参画する姿を伝える。この2つを行う情報発信媒体として、特設ウェブサイト进行。このウェブサイトでは、事業の準備段階から取り組みのプロセスを記録し、期間中、定期的に動画配信を行う。</p> <p>このことに加え、インターネットツールになじみがない人たちへも情報発信をすることを目的に、プロジェクトの内容を俯瞰的にまとめた紙媒体のニューズレターを発行する。</p>
<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>1. 障害のある人とアートのニューノーマル</p> <p>——盲ろう者と知的障害者が自ら楽しめる鑑賞方法を創出</p> <p>(1) 盲ろう者が自ら楽しめる鑑賞方法をつくる</p> <p>①ヒアリングの実施</p> <p>②鑑賞のあり方の検討会議の実施</p> <p>③盲ろう者が考えた鑑賞方法の具現化</p> <p>④盲ろう者が考えた鑑賞を体験</p> <p>⑤アンケートの実施</p> <p>(2) 知的障害者が自ら楽しめる鑑賞方法をつくる</p> <p>①ヒアリングの実施</p> <p>②鑑賞のあり方の検討会議の実施</p> <p>③知的障害者が考えた鑑賞方法の具現化</p> <p>④知的障害者が考えた鑑賞を体験</p> <p>⑤アンケートの実施</p> <p>※上記「1. (1) (2)」でできた鑑賞方法は、NO-MAが主催する展覧会で展開する。</p> <p>2. 地域とアートのニューノーマル</p> <p>——文化芸術の楽しみを地域の人々とシェアし、つながりを守る</p> <p>(1) 地域住民が出演するトークプログラム</p> <p>①トークプログラムの実施</p> <p>②アンケートの実施</p> <p>(2) 地域住民が地域の魅力をガイドする</p> <p>①町歩きイベントの実施</p> <p>②アンケートの実施</p> <p>(3) 地域住民の学びとなるトークイベント</p> <p>①トークイベントの実施</p> <p>②アンケートの実施</p> <p>3. 障害・地域とアートのニューノーマルを伝える</p> <p>——誰一人取り残さない芸術文化のあり方を記録し、生の声を伝える</p> <p>(1) 動画配信の拠点づくり</p>

	<p>①特設会場の設置</p> <p>②本事業のウェブサイト開設</p> <p>③「1. 障害とアートのニューノーマル」の配信</p> <p>④「2. 地域とアートのニューノーマル」の配信</p> <p>(2) 情報発信</p> <p>①本事業のフライヤー制作</p> <p>②本事業のニューズレター発行</p> <p>③ニューズレターを「3 (1) ②」のウェブサイトで配信</p> <p>④過去の成果をウェブサイトで公開</p> <p>(3) 報告書の発行</p> <p>①報告書発行</p> <p>②「3 (1) ②」のウェブサイトで配信</p>
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>本事業では、盲ろう者、知的障害者、高齢者を多く含む地域住民を対象に、ニューノーマルの時代においても、アートの発信者となったり、アートをきっかけに交流したりできる機会を創出するための取り組みを行った（1、2）。</p> <p>また、事業内容を効果的に共有していくため、特設ウェブサイトを立ち上げる他、動画配信や印刷媒体の発行で、内容の記録と継続的な情報発信を行った（3）。得られた成果は以下の通りである。</p> <p>1. 障害のある人とアートのニューノーマル</p> <p>——盲ろう者と知的障害者が自ら楽しめる鑑賞方法を創出</p> <p>コミュニケーションに触手話や指点字を用いるため、人との接触が必須である盲ろう者や、情報の受発信に難しさを覚える知的障害者が、ニューノーマル時代に即しつつ、かつ自らに合ったアートの鑑賞方法を主体的に考えるプログラムを実施した。</p> <p>当該のプログラムはそれぞれ「みんなの鑑賞1 障害者支援事業所いきいき+野原健司と考える。」（知的障害者）、「みんなの鑑賞2 しが盲ろう者友の会の人たちと考える」（盲ろう者）というタイトルで行った。いずれの実施においても、障害当事者が方針決定における中心的な役割に立つプロジェクトチームを形成の上、事務局と共同しながら、鑑賞方法を考えることができた。その成果は、ボードレス・アートミュージアムNO-MA（中核館）での展示、および、鑑賞会、ホームページ、ブックレット（印刷媒体）にて記録・公開した。</p> <p>アンケートにおいても、「自らに合った鑑賞方法が考えられた」との回答が100%を占め、障害当事者からの目標値を上回る高い評価があった。また、考え出された鑑賞方法を用いた作品鑑賞を体験した一般の来館者に対するアンケートにおける選択項目で「障害者が考えた鑑賞ツールにより充実した鑑賞ができた」を選択した参加者は全体の78.8%と目標値80%の近似値に留まったが、同アンケートで項目に含んでいた「いろんな鑑賞に出会えた」は100%の選択率となっており、鑑賞者に対しても、多様な鑑賞のあり方を示すに至ったといえる。</p> <p>他方で、プロジェクトに主体的に関わった障害者の数でいえば、目標12人のところ、7人となってしまったが、所属施設側との密を避けるためのコロナ対策が影響しているものである。また障害のある人の参加者数についても、目標数値を下回っているが、こ</p>

れについても、コロナ禍における障害者の活動に対する全体的な消極化がその遠因として想定される。

次に、定性的な成果についてまとめる。

(1) 社会参加

・みんなの鑑賞1 障害者支援事業所いきいき+野原健司と考える。

当初は、「(鑑賞に対して)興味がなかった」という思いを持っていたというメンバーもあり、美術鑑賞の機会自体が少ないことが想定される参加者たちであったが、プログラムの実施プロセスの中で、美術家との交流や作品の実見を経ることにより、鑑賞をつなぐ実践となった。

・みんなの鑑賞2 しが盲ろう者友の会の人たちと考える

障害特性上、「移動」「コミュニケーション」「情報入手」に困難を伴うことに加え、コロナ禍において非接触的なふるまいが求められ、さらに活動が限られる盲ろう者に向け、「美術鑑賞方法の検討」という切り口から、文化的かつ社会的な活動機会を提供できた。

(2) 障害に基づき生じる鑑賞の難しさを超克する「方法論」の考案

・みんなの鑑賞1 障害者支援事業所いきいき+野原健司と考える。

メンバーに車いすユーザーが多かったため、作品の高さを自在に変えたいというニーズに応える方法や、それぞれの個性(「おしゃべりしたい」「静かに見たい」)に基づくニーズを反映した具体的な方法が考え出され、美術鑑賞に際してそれまでメンバーが共通に感じていた「縁遠さ」を解消するような取り組みになったと同時に、既存の美術鑑賞の枠組み自体を逆照射するような、ユニークな方法を実現することができた。

・みんなの鑑賞2 しが盲ろう者友の会の人たちと考える

立体作品を、晴眼者と盲ろう者がともにさわり、そこで得られた両者の感想を交換し合うことで、作品を味わうという具体的な方法を考案するに至った。参加者の評価も高く、前例が残されていない盲ろう者との美術鑑賞において、有力な方法の一つを提案することにつながったといえる。

(3) その他

同時期に中核館で開催していた展覧会に出展していた美術家も、自らの作品を持参して同プログラムの鑑賞会に参加する運びとなった。これを機に、同美術家は自身の所属する大学機関において、視覚障害者との美術鑑賞に関するフォーラムを計画するに至っている。また、活動に関心を持ち、同じく「盲ろう者との美術鑑賞」に今後取り組みたいと考えている他の美術館より、関わる資料提供の依頼があったなど、他の取り組みへと広がりを見せている。

以上の成果より、「障害とアートのニューノーマル」という観点から、障害者とともに、それぞれが感じる美術鑑賞との距離を縮めていくような具体的方法論を考案するとともに、文化芸術を鑑賞する機会の拡大に寄与することができた。

2. 地域とアートのニューノーマル

——芸術文化の楽しみを地域の人々とシェアし、つながりを守る

ニューノーマル時代において、地域をつながりを守ることを目的に、NO-MAがある近江八幡市に根差した高齢者が中心となって活躍する場を作るべく、事業を行った。

長年にわたってこの地に暮らし、町の歴史についての豊富な知識を持つ方や、地域の伝統的町家のお庭の保全活動に取り組んでいた方など、多様なライフストーリーを持つ地域住民や、美術や福祉に関係する有識者を招いたラジオ風トークプログラムを「NO-MAご近所動画なラジオ放送局」というタイトルの下で、動画配信を行った。

こうしたオンラインでの取り組みに加えて、NO-MA主催の展覧会と町歩きガイドを地域住民に担っていただく「おいでよ近江八幡！ガイドは、NO-MAのご近所さん」を行った。

参加者へのアンケートにおいて「地域（近江八幡）や人（トーク企画出演者）などつながりが持てた」との回答は、全体の81.3%で目標数値80%を達成した。加えて、「学びや新たな発見につながった」とする回答は、93.8%にのぼっている。主体的に関わった高齢者の数についても目標の16人を上回る18人という結果になった。

次に、定性的な成果についてまとめる。

(1) 地域住民の活動が縮小傾向にある中におけるつながりの機会創出

コロナ禍を一つの契機にし、もともとの少子高齢化の波も相まって、中核館の位置する自治会でも「地蔵盆」（主に関西地方に伝わる行事）などの、大規模ではないにしても住民間の紐帯をゆるやかに保持してきたような小さな伝統的な行事が中止に追いやられるなど、地域における交流活動は縮小傾向にあった。そうした中で、ゆるやかなつながりの保持の一助となるような、主に高齢者を中心とした住民同士の交流機会を創出した。

(2) 魅力的な住民たちや地域固有の文化との出会いと発信

トークプログラムや町歩きイベントの出演者を招いたことは、多様なライフストーリーを持つ人たちとの出会いにつながった。これらが、近江八幡市の一部のみに伝わり、住民からの認知度が決して高くはない、伝統野菜「北之庄菜」や、日本唯一の湖に浮かぶ島である沖島における漁など、地域固有の文化を発信する機会となった。

以上のことから、「地域とアートのニューノーマル」の観点において、本プロジェクトでは、地域にあるつながりを守り、地域住民たちの考えや言葉を紡いでいくような取り組みとしての成果が得られたといえる。

3. 障害・地域とアートのニューノーマルを伝える

——誰一人取り残さない芸術文化のあり方を記録し、生の声を伝える

1の取り組みにおいては、障害当事者が鑑賞の方法を考えるという事業の性格から、プロセスを適切に記録した。また、2の取り組みにおいては、地域住民が本事業に参画する姿を伝えた。この2つを行う情報発信媒体として、特設ウェブサイトを立ち上げ

た。このウェブサイトでは、事業の準備段階から取り組みのプロセスを記録し、期間中、定期的に動画配信を行った。

このことに加え、インターネットツールになじみがない人たちへも情報発信をすることを目的に、プロジェクトの内容を俯瞰的にまとめた印刷媒体を作った。WEBやSNSの配信回数は当初目標60回を超え、131回に至り、積極的な発信ができたものといえる。一方で、動画の視聴回数については、2,000回再生の目標のところ、1,504回に留まった一方で、特設サイト自体は当初目標であった5,000ビューに対し、6,992ビューと、想定を上回る閲覧数があった。

加えて、印刷媒体においては、地域の回覧物と共に回し、これを目にした地域住民の方には「みんなの鑑賞1 障害者支援事業所いきいき+野原健司と考える。」の参加者の一人に知人がいることを知り、「いまこんなことをやっているんだと驚き、うれしかった」という感想を直接、事務局員に伝えられるなど、ローカルなリアクションが得られた。

以上のことから、ニューノーマル時代に突入し、情報発信のデジタル化が一般化していく中で、デジタル/アナログの双方の手段において、プロジェクトの内容を伝えることができた。

【事業実績】

※作成要領に従い事業実績は2頁で作成ください。

【事業実績】

ニューノーマル時代にアートで人をむすぶプロジェクト

1. 障害のある人とアートのニューノーマル ——盲ろう者と知的障害者が自ら楽しめる鑑賞方法を創出

障害のある人とアートの間に開く距離を縮めるためにはどうすればいいのでしょうか。「見えなさ」「聞こえなさ」や「機会のなさ」などから生まれる「縁遠さ」の解消を、障害当事者とともに考え、実践したプログラムです。

■障害者支援事業所いきいき+野原健司と考える。



プロジェクトメンバー
河原崎未識（いきいき）、
外山聖（いきいき）、
野原健司（アーティスト）、
森美菜子（いきいき）、
安田真一郎（いきいき）

検討会議の実施 全4回（7/9、8/19、9/3、9/16）



野原さんの作品を他のメンバーが見て、自分だったらどうやって作品を鑑賞してみたいか話し合いながらアイデアを出していく形で、プログラムは進んでいきました。

5つの鑑賞方法が形になりました。



安田真一郎さんが考えた
「ベストポジション」



外山聖さんが考えた
「あなたのベストポジション」「おしゃべりステッカー」



森美菜子さんが考えた
「感想シェアボード」



河原崎未識さんが考えた



みんなで考えた
「絵の高さを変えられる壁」

鑑賞会の実施（10月1日（金）13：30-14：45 参加者：4名）



それぞれの方法を考えたメンバーが、その意図を説明しながら、鑑賞会参加者に体験していただいた。

【鑑賞者への回答（回答者4人）】
・鑑賞会は、いきいきの皆さんや野原さんと一緒に楽しめましたか？
はい 100%

【障害のある参加者への質問（回答数3人）】

・このプロジェクトに参加して、自分に合った作品の楽しみ方を考えられたと思いますか？ はい 100%

参加者の声

「参加させてもらうにつれて、私にもこんなことができるんだなと実感することができました。そして私の提案が形になったことが私はすごくうれしかったです」

■しが盲ろう者友の会の人たちと考える。



プロジェクトメンバー
岡田昌也（盲ろう者友の会）、
岡本克司（盲ろう者友の会）、
北川雅貴（盲ろう者友の会）、
野中美智子（盲ろう者友の会）、
安川雄基（空間デザイナー）

検討会議の実施 全4回（7/1、8/6、8/25、9/17）



盲ろう者と、見える・聞こえる人がともに作品をさわり、対話を深めることで、作品の鑑賞を行いました。そして、互いに交換した対話の内容を、共有するための仕器づくりをともに考えました

対話の具現化



3通りの対話記録と作品を 展示する仕器を作成



岡田さんと
八幡さん



岡本さんと
石田さん



北川さんと
安川さん

鑑賞会の実施（10月8日（金）13：30-15：00 参加者：4名）



上の仕器を見た後に、実際に盲ろう者と見える／聞こえる人でさわりながら、対話する鑑賞を実施した。

【鑑賞者への回答（回答者4人）】
・鑑賞会は、しが盲ろう者友の会のメンバーと一緒に楽しめましたか？
はい 100%

【障害のある参加者への質問（回答数3人）】

・このプロジェクトに参加して、自分に合った作品の楽しみ方を考えられたと思いますか？ はい 100%

参加者の声

「盲ろう者だけでは楽しくないかも。色んな人と出会えてよかった。話し合いから参加できてよかった。盲ろう者も同じ人間として情報を交換したい」

2. 地域とアートのニューノーマル

——文化芸術の楽しみを地域の人々とシェアし、つながりを守る

この地域にあるつながりを守り、ここに住む人たちの考えや言葉を、ニューノーマル時代につないでいくため、「NO - MA ご近所、動画 RADIO 放送局」と「おいでよ近江八幡！ガイドはNO-MAのご近所さん。」の2つのプログラムを実施しました。

■NO - MA ご近所、動画 RADIO 放送局



会場となった増田邸

ラジオブース風スタジオ

ぐるりの人たちRADIO (住民たちが主役となるトークプログラム)

第1回 石居佐代子さん・小島加奈子さん、第2回 杉之原千里さん(みいちゃんのお菓子工房オーナー)・前田達慶さん(言語聴覚士)、第3回 大野宏さん(Studio on site)、第4回 川村嘉男さん・久木茂さん(レイカ34会)、第5回 麻生知宏さん・門脇真斗さん(フリースクールSince)、第6回 藤田昌喜さん(近江家具商人代表)、第7回 田口真太郎さん(成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 助教)、第8回 杉田信也さん(近江兄弟社高等学校 教諭)、第9回 久木富久子さん(びわこ学園 えがお 支援員)、第10回 塚本千翔さん(沖島民泊湖心〈ここ〉管理、漁師見習い)、第11回 大山真さん(デザイナー)、第12回 森嶋利成さん(森島商事株式会社・近江牛毛利志満 営業部長)、第13回 宮村利典さん(まちや倶楽部 代表・株式会社 Wallabv 代表取締役)

ははー、なるほどRADIO (地域住民の学びとなるトークイベント)

第1回 森美菜子さん・外山聖さん(障害者支援事業所いきいき)、野原健司さん(アーティスト)、第2回 八幡亜樹さん(アーティスト)、第3回 水上明彦さん(さふらん生活園 施設長)、第4回 ジェイド・フレンチ(リーズ大学美術・美術史・文化研究学部客員研究員)、第5回 前半:野中美智子さん(しが盲ろう者友の会 事務局)、安川雄基さん(アトリエカフエ代表) 後半:岡田昌也さん(しが盲ろう者友の会 理事長)

・地域(近江八幡)や人(トーク企画出演者など)とつながりが持てたと答えた参加(視聴)者: 81.3%

・学びや新たな発見になったと答えた参加(視聴)者: 93.8%

■おいでよ近江八幡！ガイドはNO-MAのご近所さん。



第1回 田口真太郎さんとめぐる、町歩きツアー
(成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 研究員 助教)
日時:10月9日(土) 13:30-15:00
参加者:8名

第2回 宮村利典さんとめぐる、町歩きツアー
(まちや倶楽部 代表・株式会社 Wallaby 代表取締役)
日時:11月6日(土)13:00~14:00
参加者:5名

第3回 大山真さんとめぐる、町歩きツアー
(デザイナー)
日時:11月7日(日) 10:30~12:00
参加者:4名

【参加者の感想】「ガイドが住民だったということもあって、場所に関する思い出や、そこにどんな人が住んでいたなどという記憶とともに案内が行われた。それは本で読むような知識ではなく、人を介した奥行のある学びであった」

3. 障害・地域とアートのニューノーマルを伝える

——誰一人取り残さない芸術文化のあり方を記録し、生の声を伝える

■特設サイトとブックレット



▲事業案内チラシとブックレット
▲特設サイトキャプチャ

1の「みんなの“鑑賞”」のプロセスの記録や、2の「NO-MA動画なRADIO放送局」の動画配信を行うためのホームページを立ち上げ、情報発信を行うためのプラットフォームとした。その一方で、近隣地域に多くいると考えられる、デジタルツールになじみがない高齢者層も想定しながら、印刷媒体を作成し、地域に配布した。デジタルとアナログの双方により、プロジェクトを記録、発信した。

【情報発信の成果】

情報発信 (WEB、SNS等) の回数: 131回
動画配信回数: 19回
動画の視聴回数: 結果: 1504回
特設サイトアクセス数: 6,992件
報告書の配布件数: 644か所に配布

特設サイトへはこちらから



<https://new-normal-art-project.com/>